

会話における発話の重なり後の談話展開について
—中国人上級学習者の相手言語接触場面と第三者言語接触場面の比較—

陳 新

A Study on Development of Discourse after Overlaps
in Third-Party and Partner Language Contact Situations
by Chinese Learners of Advanced Japanese

Chen Xin

摘要

在日常谈话中，有时会发生因为话语重叠而使对方话语被中断的现象。此现象发生后，双方会采用不同的方式来修复谈话。本稿调查了日语会话中中国学习者的话语与对方重叠后，双方如何调整自己的话语来推动谈话的顺利开展。具体以6名中国高级日语学习者（以下为“CNS”）为研究对象，设定了两个场面：一个是CNS与日语母语者为对象的对方言语接触场面（以下为“对方言语场面”）；另一个是CNS与非日语母语者（韩国日语学习者）为对象的第三言语接触场面（以下为“第三言语场面”）。

调查结果如下：CNS的话语与对方重叠后，当谈话对象为日语母语者时，双方并未展开话语权的争夺，而是注重于协调地推动谈话的顺利开展。但当谈话对象为韩国留学生时，CNS夺取话语权并积极地开展新话题，或者双方竞争性地争夺话语权来维持自己话语的倾向更为明显。即“对方言语场面”时，双方更注重与对方的协调关系，优先谈话的顺利开展；而“第三言语场面”时，双方更注重积极表达自己的观点来参与谈话。因此，这些使用倾向反应了：「谈话对象是不是日语母语者」这一语言外部因素会对话语重叠后的谈话展开产生一定的影响。

1. はじめに

会話は複数の人々によって、話者の交替を繰り返しながら進められていく。円滑な話者交替はターン移行の適切な場（TRP）において行われるが、実際の会話の中では、複数話者の発話が同時に現れる現象がしばしば起こる。このような現象は発話の重なりと呼ばれ、母語話者の会話においては、発話の重なりは必ずしも話者交替規則に違反するものではなく、会話参加者の同意や共感などを表し、相手と調和して会話を作り上げる効果もあるとされている（藤井他1994、木暮2002など）。一方、日本語学習者による重なりは、先行話者の発話を妨害するなど、否定的に捉えられることが多く、学習者の言語能力不足を理由に結論付けられることが多かった（劉2012など）。しかし、言語習得を考える上で、話し相手が目標言語の母語話者か否かという要因が学習者内部に生じる日本語のバリエーションに影響を与える可能性は看過できないという報告がある（陳・川口2012、赤羽2014など）。陳（2017）は、発話途中での発話の重なり、すなわち、割り込み発話に注目し、対話者が日本語母語話者か否かという違いが日本語学習者による割り込み発話に及ぼす影響を明らかにするために、日本語母語話者との相手言語接触場面¹（以下「相手場面」）に加え、非母語話者との第三者言語接触場面（以下「第三者場面」）を設定し、比較分析を行った。その結果、日本語学習者は、相手場面では支配的な割り込みの使用を控えるのに対して、第三者場面では意識が発話自体に向けられるために相手の発話に割り込みやすいという、両場面異なる中間言語の局面が窺えた。しかし、その重なりが

¹ 接触場面について、ファン（2006）は、「接触場面で実際に使われる言語（つまり、接触言語）と参加者の使用言語との関係によって、相手言語接触場面、第三者言語接触場面、共通言語接触場面の3つの場面に分類」（p.127）できると述べている。相手言語接触場面は、参加者のどちらかが相手の言語を用いてインターアクションを取る場面である。第三者言語接触場面は、参加者の双方が自分の言語ではなく第三者の言語でインターアクションを取る場面である。

現れた後、会話参加者がどのように各自の言語行動を調整するかについては、まだ明らかにされていない。そこで、本稿では、中国人上級学習者（CNS）による発話の重なりが現れた場合、その後はどのような談話展開になるか、相手場面と第三者場面の特徴を明らかにすることを目的にする。今回分析の対象とするのは、中国人上級学習者（CNS）² 6名と友人関係にある日本人（JNS）5名、韓国人上級学習者（KNS）4名との2場面10組の会話データである。

2. 先行研究と研究課題

2.1 先行研究のまとめ

これまで、日本語会話における発話の重なり後の現象に注目した研究は、母語場面及び日本語非母語話者との接触場面を扱ったものである。

母語場面における発話の重なり後の談話展開に関する研究には本田（1997）、串田（2005・2006）、都（2009）などがある。本田（1997）は、発話の重なりが現れた後、重なられた話者の反応を考察している。その重なられた話者の反応には、「①重なられても、そのまま発話を続けるもの」（p.210）と②「重なられて発話を中断してしまうもの」（p.210）という2つのタイプがある。②の場合、さらに「重なられて完全に自分の言おうとした話を断念してしまうもの」（p.210）と「重なった相手の発話が終わるのを待って、自分の言いたかったことを続けるもの」（p.211）に分けられる。串田（2005・2006）は、発話の重なりをオーバーラップと呼び、オーバーラップが現れた後に、話者が自分の発話を調整する手段として「再生」と「継続」があることを指摘している。また、都（2009）は重なり後の現象に注目し、重なりによって中断され

² 調査対象者CNSと会話相手の日本語能力は、滞日期間（1年以上）、学習歴（800時間以上）、日本語能力試験（N1/1級）の資格によって上級と判定した。

た発話がどのように修復されているかについて考察を行っている。その結果、修復の過程で、中断された自己発話をしばらく保留し、相手の発話に合わせた後で自ら修復したり、中断発話を強制的に自己発話に合わせて修復したりする例が見られた。一方、中断発話が修復されずに流れてしまった場合や自己発話を優先した修復のストラテジーなどもあったと報告している。以上のように、母語場面においては、発話の重なりが現れた後、会話参加者は様々な言語調節を行って発話を調整することが予想される。

一方、日本語学習者を対象とした研究は、比較的新しく、劉（2012）などがある。劉（2012）は、接触場面における学習者による割り込みの特徴が母語話者のそれと異なるといかに異なるかを分析し、その結果、学習者の場合は母語話者と比べ、「新情報の提示」のような新たなフロア³を築く割り込みの頻度が高いという結果を得た。しかし、これらの研究は母語場面及び非母語話者との接触場面を扱ったものに限られ、非母語話者同士の第三者場面にはまだ言及されていない。

近年、グローバル化の急速な進展につれて、母語の異なる学習者同士が行うインターアクションは教室内外で頻繁に行われており、学習者の日本語使用場面は母語話者との接触場面に限られるわけではない。村岡（2010）によると、グローバル化の急速な進展は接触場面の多様化を拡大させているだけでなく、そこに参加する当事者の言語管理にも質的に変化を生じさせている。そこで、接触場面の言語特徴を考察する際に、日本語母語話者と非母語話者それぞれの談話の特徴を比較するに留まらず、接触場面の動的側面、特に非母語話者同士の第三者場面の中に立ち

3 「フロア」とは、林（2008）によれば、話の主導権の認識に関する心的な概念である。ターンが交替しても、会話者がその場の話の主導権の属性を巡って共通の認識を持つ限りは、フロアの所有者は変わらない（p.108）。

現れる個々のミクロな使用実態にも注目していくべきではないだろうか(加藤2010、川口2015)。

2.2 本研究の立場と研究課題

上記の背景を元に、本稿では相手場面と第三者場面におけるCNSによる発話の重なり後の談話展開という現象を研究対象とし、対話者が日本語母語話者であるか否かという要因が、CNSによる発話の重なり後の談話展開にどのような影響を与えるか明らかにすることを目的とする。具体的な研究課題を以下の2点に設定する。

- ①相手場面と第三者場面において、中国人上級学習者(CNS)による発話の重なりが生じた後、談話はどのように展開するか。
- ②それぞれの場面における談話展開にはどのような特徴があるか。

3. 調査概要と分析方法

本調査では、会話場面を「対友人」(「親-親」の社会関係)に設定した。また、会話参加者の社会的属性を統制するために、全データ協力者を大学に属する学部生と大学院生(20代の女性)とした。そして、第三者場面における相手の母語の要因を除くために、CNSの会話相手を韓国人上級学習者に統一した。これらの条件をもとに、中国人上級学習者(CNS)6名と友人関係にある日本人(JNS)5名、韓国人上級学習者(KNS)4名との2場面10組による自由会話を収録した。表1に会話参加者のインフォーマントを、表2に会話情報を示す。話題は自由で日常生活で行われる会話と同じような世間話でよいと伝え、1組15～20分間ずつの会話、合計約220分の会話を収録した。調査時期は2010年10月及び2016年6月⁴であった。会話の収録が終了した後、フォローアップインタビューを行い、会話参加時の意識や会話の全体的な印象

について確認した。また、収録した10組の会話データを宇佐美（2006）の「改訂版：基本的文字化の原則BTSJ」に従って文字化した。

表1 会話参加者のインフォーマント情報

調査協力者	日本語能力	出身地	母語	性別	年齢	滞日期間	日本語学習歴
CNS1	上級	中国	中国語	女	25	2年7ヶ月	5年6ヶ月
CNS2	上級	中国	中国語	女	21	1年	3年2ヶ月
CNS3	上級	中国	中国語	女	21	1年	3年2ヶ月
CNS4	上級	中国	中国語	女	23	1年8ヶ月	5年2ヶ月
CNS5	上級	中国	中国語	女	22	6年	3年
CNS6	上級	中国	中国語	女	24	1年8ヶ月	5年2ヶ月
JNS1	母語話者	群馬県	日本語	女	23	—	—
JNS2	母語話者	埼玉県	日本語	女	22	—	—
JNS3	母語話者	群馬県	日本語	女	20	—	—
JNS4	母語話者	千葉県	日本語	女	22	—	—
JNS5	母語話者	埼玉県	日本語	女	22	—	—
KNS1	上級	韓国	韓国語	女	27	4年	6年6ヶ月
KNS2	上級	韓国	韓国語	女	21	1年1ヶ月	7年
KNS3	上級	韓国	韓国語	女	21	1年	4年
KNS4	上級	韓国	韓国語	女	21	1年	4年

表2 会話情報

	相手場面	第三者場面
「対友人」会話 (親-親)	「CNS1-JNS1」場面	「CNS1-KNS1」場面
	「CNS2-JNS2」場面	「CNS2-KNS2」場面
	「CNS3-JNS3」場面	「CNS3-KNS3」場面
	「CNS4-JNS4」場面	「CNS4-KNS2」場面
	「CNS5-JNS5」場面	「CNS6-KNS4」場面

4 「CNS1-JNS1」場面と「CNS1-KNS1」場面の会話は筆者の修士課程の時期（2010年10月）に、ほかの8組の会話は博士後期課程の時期（2016年6月）に収録したデータである。

分析の手順としては、まず、「相手場面」と「第三者場面」におけるCNSによる発話の重なりを取り上げ、その重なり後の談話展開について分析を行う。次に、具体的な会話例に基づき、両場面の特徴及び差異を明らかにする。

4. 調査結果及び考察

4.1 両場面における発話の重なり後の談話展開

CNSによる発話の重なりは相手場面が162発話であるのに対して第三者場面が221発話であった。そのCNSによる重なり後の談話展開を観察した結果、大きく「1. 支障なく両者の発話が続行する」、「2. 重ねられた話者が中断発話を再開する」、「3. 重ねた話者がターンを取る」、「4. 競合的に各自のフロアを継続する」の4パターンが把握された。相手場面と第三者場面における各談話展開パターンの出現率を表3-1に示す。

表3-1 両場面における重なり後の談話展開

談話展開パターン	談話数 (%)		
	相手場面	第三者場面	合計
1. 支障なく両者の発話が続行する	121 (74.7)	130 (58.8)	251 (65.5)
2. 重ねられた話者が中断発話を再開する	31 (19.1)	56 (25.3)	87 (22.7)
3. 重ねた話者がターンを取る	10 (6.2)	27 (12.2)	37 (9.7)
4. 競合的に各自のフロアを継続する	0 (0.0)	8 (3.6)	8 (2.1)
合計	162 (100.0)	221 (100.0)	383 (100.0)

($\chi^2(3) = 14.575, p < .01$)

この結果について χ^2 検定を行ったところ、1%水準で有意であった($\chi^2(3) = 14.575, p < .01$)ことから、重なり後の談話展開には相手が日本語母語話者であるか否かが影響することが把握された。その残差分

析を行った結果を表3-2に示す。

表3-2 残差の一覧表

談話展開パターン	相手場面	第三者場面
1. 支障なく両者の発話が続行する	3.2**	-3.2**
2. 重ねられた話者が中断発話を再開する	-1.4ns	1.4ns
3. 重ねた話者がターンを取る	-2.0*	2.0*
4. 競合的に各自のフロアを継続する	-2.4*	2.4*

(ns : not significant, *p<.05, **p<.01)

表3-2から、「1. 支障なく両者の発話が続行する」場合は相手場面で有意に高いのに対して、「3. 重ねた話者がターンを取る」と「4. 競合的に各自のフロアを継続する」場合は第三者場面で有意に高いことが分かる。「2. 重ねられた話者が中断発話を再開する」場合は両場面に有意差が見られなかった。つまり、CNSによる発話の重なりが生じた後、相手場面では、会話の進行に支障なく会話参加者両者（CNSとJNS）が発話を続行する傾向が強いのに対して、第三者場面では、重ねた話者（CNS）がターンを取る、さらに会話参加者両者（CNSとKNS）が競合的に各自のフロアを継続するという傾向があることが分かった。

以下、それぞれの談話展開パターンについて、具体的な会話例に基づき、両場面の特徴と差異を明らかにする。

4.2 支障なく両者の発話が続行する

まず、両場面ともに最も多く、相手場面で有意に高い「支障なく両者の発話が続行する」パターンについて考察する。

これは、CNSによる発話の重なりが生じても、会話参加者両者が各自の発話を中断せず、それぞれ言いたいことを続行しながら会話を円滑

に進める談話である。

例1（韓国人学習者は日本語が得意であることについて）

105 CNS2：二人とも日本語めっちゃうまいし。

→106 KNS2：いやいや、ぜん [<ぜんうまい>ほうじゃないから。

→107 CNS2： [<問題ないよ>。

108 KNS2：このようには、日本語が得意な人がたくさんいるよ。

109 CNS2：それは確かに。

110 KNS2：うん。

例1では、CNS2は105で「二人とも日本語めっちゃうまいし」と言っ
て、相手のKNS2ともう一人の韓国人学習者の日本語がうまいとほめて
いる。KNS2がそれに対して、106で「いやいや」と謙遜して、「ぜん」
まで発話したところで、CNS2はその発話内容を察知し、それを否定し
て、107で「問題ないよ」と述べたことで重なりが生じている。KNS2
はその後、108で「このように、日本語が得意な人がたくさんいるよ」
と情報を加えて、109でCNS2が「それは確かに」と同意していること
から、発話の重なりが生じて、二人の発話が同時に成立しながら円
滑な会話が進んでいることが分かる。106と107で発話の重なりが生じ
ながら、KNS2もCNS2もどちらも各自の発話を中断せず続行している。
これは、CNS2の発話の重なりが相手の謙遜を否定し、相手をほめるた
めのものであり、相手からターンを奪うための発話ではないためと考え
られる。

このパターンの相手場面の例を挙げる。例2は中国映画の日本語字幕
に関する談話である。

例2 (中国映画の日本語字幕について)

304 CNS2:そして、翻訳もそんなに、なんか適当すぎる(へー)、
日本語の翻訳、字幕。

305 JNS2:なんか、翻訳、日本語は特に長くなっちゃうから、
どうしても。

306 JNS2:何文字以内でおさめなさいって決まっているん<だっ
て>|<|。

307 CNS2:<ああ>|>、そうなんだ。

308 JNS2:だから、たとえば、四字熟語とかさ、(うん)、絶対四
文字じゃん。

→309 CNS2:[<ああ、四文字>|<|。

→310 JNS2:[<日本語で>|>|言えない [<じゃん>|<|。

→311 CNS2: [<そうそう>|>|そうそう。

312 JNS2:すごい長くなるじゃん。

313 JNS2:やばいの(JNS2の笑い)。

→314 JNS2:ギョッて [<しては>|<|いけないから (JNS2の笑い)。

→315 CNS2: [<ギョッて>|>|。

→316 JNS2:だから、すごく難 [<しいと思う>|<|。

→317 CNS2: [<そう、だから意>|>|味もちよっ
と変わった(うん)みたいで。

308「だから、たとえば、四字熟語とかさ、絶対四文字じゃん」で
JNS2の発話が終了したと予測したCNS2は、309で「ああ、四文字」
と相手の発話の一部を繰り返して発話を開始している。それと同時
に、JNS2は310で再びターンを取って、「日本語で言えないじゃん」と
発話を開始したために、309と310が発話冒頭で重なっている。続い

て、310JNS2の発話終了付近で、CNS2は共感を表す「そうそうそうそう」と発話を開始したために、2回目の重なりが生じている。また、JNS2の314「ギュッてしてはいけないから」の途中で、CNS2は315で「ギュッて」と相手の発話の一部を繰り返して発話を開始したために、3回目の重なりが生じている。さらに、その後、JNS2が316で「だから、すごく難しいと思う」と話している途中で、CNS2は317で「そう、だから意味もちょっと変わったみたいで」と発話を開始したために、重なりが生じながらも、それぞれ言いたいことを続行している。このように、CNS2による発話の重なりが4回生じているが、CNS2もJNS2も各自の発話を中断せず続行していることから、二人の発話が同時に成立しつつ会話が円滑に進んでいることが分かる。これは、相手の発話にあらわれた単語を相手の発話に重ねていくことによって、相手の話を聞いていることを示すための重なりと言えよう。

例1と例2では、CNSによる発話の重なりが生じても、その重なりは相手をほめたり、相手の発話を繰り返したりして、相手の発話への関心などを示すものであり、相手の発話権を取る発話ではないため、会話の進行が妨げられず会話が円滑に進んでいる。つまり、会話参加者二人は、各自の発話を中断せずに、お互いに相手の話に強い関心と肯定的な態度を示しつつ、それぞれが自分の発話を続行しながら会話を円滑に進めていると考えられる。

このパターンは相手場面と第三者場面においては、それぞれ74.7% (121談話) と58.8% (130談話) で、両場面ともに最も多かった。これは、コミュニケーションにおいては、相手の母語を問わずあらゆる場面において、会話参加者は「円滑な会話成立」を目指して会話を進めるのが一般的であるためと考えられる。一方、場面差に注目すると、このパターンは、相手場面の方が第三者場面より有意に多く起こっていた。CNS

による発話の重なりが現れた後、相手場面の方が会話の進行に支障なく両者の発話が続行する傾向があるのである。このことから、相手場面では、会話参加者双方が円滑な会話成立を目指して協調的に会話を進める傾向があることが示唆される。

4.3 重ねられた話者が中断発話を再開する

次に、「2. 重ねられた話者が中断発話を再開する」パターンについて検討する。このパターンのその後の談話展開を観察したところ、「①相手の発話に応じた後に継続する」、「②中断された発話を共同で継続する」、「③直ちに中断された発話を継続する」の3パターンが観察された。相手場面と第三者場面における各パターンの結果を表4に示す。

表4 重ねられた話者が中断発話を再開した後の談話展開

	談話数 (%)		
	相手場面 (JNS)	第三者場面 (KNS)	合計
①相手の発話に応じた後に継続する	15 (48.4)	23 (41.1)	38 (43.7)
②中断された発話を共同で継続する	10 (32.3)	21 (37.5)	31 (35.6)
③直ちに中断された発話を継続する	6 (19.3)	12 (21.4)	18 (20.7)
合計	31 (100.0)	56 (100.0)	87 (100.0)

($\chi^2(2) = 0.053ns$)

相手場面・第三者場面ともに、「①相手の発話に応じた後に継続する」談話展開が最も多く、次いで「②中断された発話を共同で継続する」「③直ちに中断された発話を継続する」の順であった。その結果について χ^2 検定を行ったところ、各パターンは両場面には有意差はなく、それぞれが占める割合に大きな違いは見られなかった。以下に各パターンの例文を示す。

①相手の発話に応じた後に継続する

これは、重ねられた話者が、中断された発話をしばらく保留し、CNSの重ねた発話に応じた上で完結する談話である。

例3（友人及びクラスメートと話す時の声の高さについて）

→192 JNS3：大学で同じクラスで、2人、「NSF1」、「NSF2」ちゃん（共通の日本人女性の友人）いるんだけど、その子と話す時はめっちゃ声が高いけど、[<違うクラス>|< 【】。

→193 CNS3： 【】 <自分が意識>|>していないよね。

→194 JNS3：してない。

→195 JNS3：違うクラスの子とか話す時は声が低い。

196 CNS3：でも、それがテン、テンションと関係があるから。

195 JNS3：テンションと関係があると思う。

例3では、JNS3は192で、「友人と話す時は声が高いが、違うクラスの子と話す時は声が低い」ことを説明しようとしている。しかし、JNS3が「違うクラス」について更に話を展開しようとしているところで、CNS3が193で「自分が意識していないよね」と自分の意見を述べ、JNS3に確認を求めたために、JNS3の「違うクラス」の発話がCNS3の発話と重なって中断されている。JNS3は重ねたCNS3に対して、194で「してない」と応答した後、195で、中断された192「違うクラス」の後を「違うクラスの子とか話す時は声が低い」と続けている。このように、JNS3の発話はCNS3の発話と重なって一時的に中断されたが、CNS3の発話に応答した上で同一話題の発話を再開している。

このようなパターンは相手場面で48.4%（15談話）、第三者場面で

41.1% (23談話) で、両場面には大きな違いは見られなかった。

②中断された発話を共同で継続する

これは、重ねられた話者が重ねた話者CNSと共に中断した発話を継続する談話である。例4はKNS1が出勤先で困ることについて話している談話である。

例4 (KNS 1の出勤先の困ることについて)

195 KNS1: 出勤に行って (うん)、人がいないから、もう返事はないのが第一困ること。

196 KNS1: で、第二は〈笑いながら〉おばさんがいること。

197 CNS1: ははははは (笑い)。

→198 KNS1: おばさんがいると 【】。

→199 CNS1: 【】 絶対何か話しかける。

→200 KNS1: 30分ぐらいかかるね。

201 CNS1: うんうんうん。

KNS1が第二に困ることについて198で「おばさんがいること」と話し出すと、CNS1は199でKNS1の先取りをして、「絶対何か話しかける」と発話を完結している。つまり、198KNS1の発話は199CNS1の割り込みによって中断されたものの、伝えようとした情報はCNS1の先取り発話によって完成されている。さらに、KNS1は199CNS1の発話を踏まえて、200で「(おばさんと話していると) 30分ぐらいかかる」と続けている。串田(2006)は、ひとりが開始したターンをもうひとりが共同で完結させることを、「共-参加者による完了」(p.38)と呼んでいる。このパターンは、重ねた話者と重ねられた話者が共同で一つの発話を構

築しようとするものと考えられる。

このようなパターンは相手場面で32.3% (10談話)、第三者場面で37.5% (21談話) で、ほぼ同様であることが分かる。

③直ちに中断された発話を継続する

これは、重ねられた話者がCNSの重ねた発話に配慮せずに、中断された自身の発話を直ちに再開する談話である。例5では、KNS2は、ライブがあるので10月にまた日本に来ること、そのライブ会場が埼玉アリーナ (会場名) なので、共通の友人「〇〇」の部屋に泊まる予定であることを話している。

例5 (「〇〇」(共通の韓国友人)の部屋に泊まることについて)

117 KNS2: そう、たぶん、や、「〇〇」(共通の韓国友人)の部屋に泊まる。

118 CNS2: ああ、そうなんだ。

119 CNS2: そう、「〇〇」たちもまだいるよね。

(省略)

122 KNS2: うんうん、ちょうど、なんか、そのライブをやる場所は埼玉アリーナ (会場名)。

121 CNS2: えー [↑]。

122 KNS2: <で>|<|。

123 CNS2: <じゃ>|>|、近いじゃん。

124 KNS2: うん、大宮から一駅らしい。

125 CNS2: そっか。

→126 KNS2: で、[<ちょうど>|<| 【】。

→127 CNS2: 【】 <30分>|>|、40分ぐらいかなあ。

→128 KNS2：で、ちょうどだから、「〇〇」の部屋に泊まって。

129 KNS2：[違う口調で] “みんな久しぶり”。

130 CNS2：いいね。

KNS2が126で「で、ちょうど」と話している途中で、CNS2が127で「30分」と発話を開始したために重なりが生じている。126KNS2の発話はその重なりによって中断されたが、その後、KNS2は、127CNS2の重ねた発話に応じずに、CNS2が「30分、40分ぐらいかな」と言い終わるのを待って、128でターンを取って、「で、ちょうどだから、「〇〇」の部屋に泊まって」とそのまま直ちに中断された発話を継続し完成させている。このパターンでは、中断された話者、すなわち重ねられた話者が、相手の発話には応じずに自分の発話の後半部分を直ちに継続していることから、相手の発話に対する配慮よりも自己発話の調整のほうを優先していることが窺える。以上のような、相手の発話が終わるのを待って、直ちに中断された発話を継続するものを、本田（1997）では、「自己主張型」と呼んでいる。

このようなパターンは相手場面で19.3%（6談話）、第三者場面で21.4%（12談話）であった。

4.4 重ねた話者がターンを取る

続いて、第三者場面で有意に高い「重ねた話者がターンを取る」パターンについて考察する。

これは、重ねられた話者が中断された発話を継続せずに、重ねた話者CNSがターンを取る談話である。

例6 (日本人の友達を作ることができないことについて)

372 CNS2: 私たち、なんか、寂しかったよね、秋学期。

373 KNS2: そう、<そうそう><|>。

374 CNS2: <あんまり>>|>日本人の友達作れないし。

→375 KNS2: それと、まあね、何か問題があったかなあ、なんかいろいろ作れなくてね、[<急に>><|> 【】。

→376 CNS2: 【】 <でも>>|>、なんか、今回も男性たちは結構もてるじゃない [↑]。

→377 KNS2: わっち (大学のサークル名) の?

→378 CNS2: いや、来た韓国人の、(ああ)、男性たち。

379 KNS2: うんうん、結構人に親しい?

380 CNS2: いや、親しいっていうか、まあ、日本人の女性が自分から自らこうやって近づいてくるし>><|>。

381 KNS2: <うんうん>>|>。

例6では、CNS2とKNS2は372-375で秋学期は日本人の友達を作ることができなかったことについて話している。KNS2は375で「それと、まあね、何か問題があったかなあ、なんかいろいろ作れなくてね」まで話したところで、CNS2は、KNS2の話を最後まで聞かずに、376でターンをとって「でも、なんか今回も男性たちは結構もてるじゃない [↑]」と新情報を持ち出して、KNS2の発話を中断させている。KNS2は、中断された自身の発話を継続せずに、続いて377で「わっちの(男性か)?」とCNS2に確認している。CNS2はそれに対して、378で「いや、来た韓国人の男性たち」と言って、「わっちの男性ではない」と答えている。さらに、CNS2とKNS2は378-381まで、CNS2が割り込んだ「韓国人の男性の方がもてる」という話題をめぐってターンを取り

合って談話を展開している。このように、KNS2の中断された発話375は修復されなかったが、CNS2が重ねた発話によって、双方が互いに相手の発話内容を踏まえて、自分の意見を述べ合っていることから、この部分に会話参加者の相互交流が促進されたことが分かる。

このパターンは相手場面で6.2% (10談話)、第三者場面で12.2% (27談話) で、第三者場面の方が相手場面より有意に多く起こっていた。つまり、CNSによる発話の重なりが現れた後、第三者場面のほうが、重ねられた話者が中断発話を修復せず、重ねた話者CNSがターンを取ることによって話題が変更されていく傾向が強いと言える。そのCNSによる重なりによって相互交流が促進され、積極的な会話参加状況が継続されていく場面が多く観察された。

4.5 競合的に各自のフロアを継続する

最後に、重ねた話者CNSと重ねられた話者が競合的にターンを取って各自のフロアを構築する談話を考察する。例7は、KNS2が共通の友人「〇〇」(名前)と男性の友人JNSの部屋でよく映画を見ていたことについて話している談話である。

例7 (男性友人の部屋で映画を見たりしたこと)

451 KNS2: で、先輩たちと「CNS2」ちゃんとか、「〇〇」(名前)とかよく映画一緒に見たりしてたじゃん、その「〇〇君」(JNS男性)の部屋で。

452 CNS2: 一回も行かなかったよ、私。

453 KNS2: えっ?行かなかった?。

454 CNS2: 行かなかった。

→455-1KNS2: ええ [↑] そうか、「〇〇」(名前) [、

- 456-1CNS2 : [それは [<なん
か>|>|,,
→455-2KNS2 : [<「○
○」>|<、「○○」(名前) ,,
→456-2CNS2 : 男の子の部屋に行くのは、ちょっとあれ<だけど>|<|。
→455-3KNS2 : < 2回>|>|、3、3回とか行ったことがあるけど、<
「○○」(名前) は>|<|。
457 CNS2 : <私>|>|ない、そう。

CNS2は、452で「(自分は) 一回も行かなかった」と述べ、2人の会話に食い違いが起きる。KNS2は453「えっ?行かなかった?」とCNS2の発話を繰り返すことによって事実を確認しようとしたのに対して、CNS2は454で再度、自分は男性の友人JNSの部屋には行ったことがないことを伝えている。KNS2は、455-1で「そうか」と言って理解したことを示した後、455-3まで、実際に一緒に男性の友人JNSの部屋に行ったのは「○○」(名前)であったことを話し続け、自身の発話を修正しようとしている。一方、CNS2は、456-1と456-2で、男性の部屋へ行くのは躊躇されることを話し続けている。CNS2とKNS2は、455-1～455-2で互いの発話に割り込んでそれぞれの言いたいことを話し続け、競合的に各自のフロアを継続していることが分かる。特に、455-2でKNS2が「「○○」、「○○」(名前)」とターンの冒頭で繰り返しているのは「ターン冒頭再生」(串田2006)であり、「相手発話が始始している行為を制止することによって自発話の発話連鎖状の接続関係を保持するために用いる」(串田2006:p.98)ものである。そのKNS2の「ターン冒頭再生」による制止行為にもかかわらず、CNS2はターンを譲らず456-2「男の子の部屋に行くのは、ちょっとあれだけど」と続けて自分

の言いたいことを言い切り、その後、KNS2も455-3「2回、3回と行ったことがあるけど、「〇〇（名前）」は」と、自分の言うべきことを完成させている。このようなパターンは相手場面では見られなかったが、第三者場面では8談話（3.6%）が観察されて、第三者場面の方が相手場面より有意に多く起こっていた。このことから、CNSによる発話の重なりが現れた後、第三者場面では、会話参加者双方が各自の意見を明瞭に表現することを優先し、競合的にフロアを継続する傾向が強いことが示唆される。

5. 総合考察

以上、「対友人」会話に注目し、相手場面と第三者場面におけるCNSによる発話の重なり後の談話展開について考察した。その結果、CNSによる発話の重なりが現れた後、「1. 支障なく両者の発話が続行する」、「2. 重ねられた話者が中断発話を再開する」、「3. 重ねた話者がターンを取る」、「4. 競合的に各自のフロアを継続する」の4パターンが観察された。両場面における各談話展開パターンの出現率を比較すると、両場面ともに「1. 支障なく両者の発話が続行する」が最も多かった。このパターンでは、CNSによる発話の重なりが生じても、その重なりは、相手の発話権を取る発話ではなく、相手の発話への肯定的な関わりを示すものであるため、会話の進行も妨害されず会話が円滑に進んでいる。

一方、各談話展開パターンの場面差に注目すると、「1. 支障がなく両者の発話が続行する」場合は相手場面で有意に高いのに対して、「3. 重ねた話者がターンを取る」、「4. 競合的に各自のフロアを継続する」場合は第三者場面で有意に高い。特に「4. 競合的に各自のフロアを継続する」については、相手場面では全くないのに対して、第三者場面でのみ観察された。この結果から、CNSによる発話の重なりが現れた後、

相手場面では、会話参加者双方（CNSとJNS）が発話を中断せずそれぞれ言いたいことを続行しながら会話を円滑に進める傾向があるのに対して、第三者場面では、重ねた話者（CNS）がターンを取って自己表現する、さらに、会話参加者双方（CNSとKNS）が互いにターンを譲らず各自の意見を明瞭に述べて競合的に各自のフロアを継続するという傾向がある。つまり、相手場面と異なり、第三者場面では、非常に強い自己表現意欲及び積極的な会話参加の姿が窺える。

では、両場面においては異なる言語調節が生じている背景には、どのような要因が関わっているのだろうか。

赤羽（2014）は非母語話者の日本語会話場面の心理面の調節を分析し、相手場面では、相手に気をつかい問題化しないよう、うまく会話を成り立たせようと意識するが、第三者場面では、対人関係に留意せず、自己表現を積極的に行い、話の内容を深めようと意識することを指摘している。今回の調査結果に合わせてみると、CNSによる発話の重なりが現れた後、相手場面では、友人同士であっても、会話参加者双方は相手を気づかう配慮が相互に強く働き、協調的な人間関係の維持を志向するために、円滑な会話成立を優先するが、第三者場面では、対人関係への配慮よりは、積極的な自己表現の方を志向するために、互いに各自の意見を明瞭に述べ、さらに、その重なりをきっかけに、談話の内容を協同で作りに上げて積極的に会話に参加する傾向があると考えられる。

また、岩田（2006）は、第三者場面では会話参加者双方が互いに意見や情報を自発的に述べ合い、積極的に談話の内容を協同で作りに上げるという「対称的な参加」が多く観察されたことを報告している。さらに、ファン（1998・2006）は、母語話者と非母語話者が参加する相手場面の場合、参加者の間に「言語ホスト－言語ゲスト」という関係が存在するとし、使用される言語の母語話者が言語ホストとなり、話題の発展など

会話の方向付けをコントロールすることが多いが、非母語話者は会話参加を最小限にしたり回避したりして言語ゲストとしての参加調整を行う傾向があるとしている。ファン（1999）や春口（2004）などは、非母語話者同士による第三者場面では、はっきりとした「言語ホスト-言語ゲスト」の関係が確立できないため、相手に頼ったりするような参加よりも、積極的な自己参加の調整を選択することが多く、時には言語ホストの調整を活用しようとする行動が見られるという。以上の指摘を踏まえると、第三者場面では、参加者間の関係が固定されず、動的であるため、CNSによる重なりが現れた後、会話参加者双方（CNSとKNS）が相互にターンを譲らず積極的に自己表現して各自の発話を遂行すると考えられる。さらに、重ねた話者CNSがターンを取って会話の方向付けと展開をリードするという「ホスト」的に振る舞う傾向が窺える。それによって、第三者場面の方が相手場面より会話参加が対称的になり、活性化されるのではないだろうか。

また、劉（2011）は知人関係の四者間の日本語母語話者による会話データを分析対象としているが、重なり後の談話展開の特徴については、二者間の調整場面において、発話の途中で重なりが現れると、発話が重なった二人の話者が競合的にターンを取って各自の発話を継続するパターンが観察されたことを指摘している。今回の調査では、CNSによる発話の重なりが現れた後、劉（2011）が指摘したような、参加者双方が競合的に各自のフロアを継続するというパターンが第三者場面でのみ観察された。つまり、重なり後の談話展開においては、第三者場面では母語場面と類似した調整が行われていると言えるだろう。これは、「第三者言語接触場面の参加者が内的場面⁵に似た参加の仕方」（ファン

5 内的場面とは母語場面のことである。

2011 : p.49) をするという先行研究の知見を裏付ける結果と考えられる。

今回は、発話の重なり後の談話展開という視点から、相手場面と第三者場面における会話参加の様相について考察を行った。今後は、話題導入の頻度や話題導入の形式に注目し、両場面における「会話参加の対称性」について考察を行いたい。

<引用文献>

- 赤羽優子 (2014) 「日本語非母語話者の日本語接触場面における心理面の調節」『計量国語学』 29 (5), pp.131-153
- 岩田夏穂 (2006) 「日本語非母語話者同士の参加の様相—留学生の自由会話の場合—」『人間文化論叢』 9, pp.175-187
- 宇佐美まゆみ (2006) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ) 2005年 2 月25日改訂版」『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』言語情報学研究報告13、東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」, pp.21-46
- 加藤好崇 (2010) 『異文化接触場面のインターアクション：日本語母語話者と日本語非母語話者のインターアクション規範』, 東海大学出版会
- 川口良 (2015) 「日・中・韓接触場面における討論の分析—談話における「逸脱」に注目して—」『文学部紀要』 文教大学文学部29 (1), pp.1-36
- 串田秀也 (2005) 「参加道具としての文—オーバーラップ—発話の再生と継続—」串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『活動としての文と発話シリーズ 文と発話 1』 ひつじ書房, pp.27-61

- 串田秀也 (2006) 『相互行為秩序と会話分析：「話し手」と「共－成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社
- 木暮律子 (2002) 「話者交替における発話の重なり—母語場面と接触場面の会話について—」『日本語科学』11, pp.115-134
- 陳新・川口良 (2012) 「中国語を母語とする日本語上級学習者の文末スタイルシフトに関する一考察」『言語と文化』25, 文教大学, pp.70-100
- 陳新 (2017) 「中国語を母語とする日本語上級学習者の割り込み発話に関する一考察—相手言語接触場面と第三者言語接触場面の比較—」『言語文化研究科紀要』3, 文教大学大学院, pp.21-50
- 都恩珍 (2009) 「重なり後の発話の中断と修復現象の一側面」『桜花学園大学人文学部研究紀要』11, pp.69-77
- 林宅男 (2008) 『談話分析のアプローチ：理論と実践』研究社
- 春口淳一 (2004) 「言語ホストとしての上級学習者の自己参加調整ストラテジー：第三者言語接触場面における会話参加の一考察」『千葉大学日本文化論叢』(5), pp.86-73
- ファン, S. K. (1998) 「接触場面における言語管理」『国立国語研究所日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成 研究会発表原稿・会議録』, pp.1-16
- ファン, S. K. (1999) 「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』2 (1), 社会言語科学会, pp.37-48
- ファン, S. K. (2006) 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』独立行政法人国立国語研究所編, 株式会社アルク, pp.120-137
- ファン・サウクエン (2011) 「第三者言語接触場面と日本語教育の可能

性』『日本語教育』150, pp.42-55

藤井桂子・大塚純子（1994）「会話における発話の重なりについて：協力的側面を中心に」『言語文化と日本語教育』8, お茶の水女子大学日本語言語文化学会, pp.1-13

本田明子（1997）「発話の「重なり」と談話進行」『女性のことば（職場編）』現代日本語研究会編, ひつじ書房, pp.197-212

村岡英裕（2010）「接触場面の変容と言語管理：接触場面の言語管理研究vol.8」, 千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書vol.228, 千葉大学大学院人文社会科学研究所

劉佳珺（2011）「会話における発話の重なりについて」『言語と文化』12, 名古屋大学大学院 国際言語文化研究科, pp.49-66

劉佳珺（2012）「会話における割り込みについての分析：日本語母語話者と中国人日本語学習者との会話の特徴」『異文化コミュニケーション研究』24, 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所, pp.1-24